

学校名 : 長野県小谷村立小谷小学校		
モンゴル国	氏 名 : 川尻 年輝	● 実践教科等 : 特別活動・道徳
		● 時間数 : 7時間
		● 対象生徒 : 小学校2年生
	[担当教科: 全科]	● 対象人数 : 19人

1 単元名

モンゴルと小谷と私たち

2 単元の目標

- ・モンゴルやボリビアの文化や生活の違いを学び、世界に目を向ける。(多面的・総合的に考える力)
- ・モンゴルの文化や習慣を知ることきっかけに、世界には様々な国や文化があることを知り、他国を尊重する態度を育む。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルで活躍する日本人の姿やモンゴルからの支援を知ることを通し、異なる文化をもつ人々と一緒に活動したり、協力したりお互い助け合っていることに気づく。(つながりを尊重する態度)
- ・モンゴルを始めとする世界が抱えている問題を知り、自分自身にできることを考える。(進んで参加する態度)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

4 単元の指導について

(1)教材観

国際教育あるいは国際理解教育を推進するための手立ては様々ある。しかし、教師自らが体験したことを通して授業を行っていくことは、子どもたちの心に届きやすい。

現在、たくさんの外国につながる人々が日本で生活している。産業界でも日本経済を支える担い手として重要な役割を果たしていると言える。

これらの人々にとって、社会の仕組みや文化など大きな違いがあろう日本の地で生活していくことは、多くの困難があることが予想される。多くの方々が自力で慣れていかざる得ない状況である。しかし、外国につながる人々たちに対して、日本の人たちがもっと気軽にコミュニケーションすることはできないであろうか。日本側から外国の文化やマナーを積極的に知り、共生していくための心構えを持つ人々が一人でも多く増えていくことで外国につながる人々たちにとって住みやすい日本になるように思われる。

これからの子どもたちにとって、多様な見方や考え方をもち、広い視野を持って成長していったらいいと思う。

このことについて、担任自らがモンゴルで学んだこと体験したことを活かし授業を仕組むことで、子どもたちにとって新たな視点を持ったり、見つけたりできる一助になるのではないかと考える。

(2)児童生徒観

本校の子どもたちにとって、隔週または毎週1コマのイギリス人講師からの外国語活動の中で海外を感じる時間もあるが、外国につながる児童が在籍しているクラスはあまりなく、海外を身近には感じていないのではないかとと思われる。

しかし、隣の白馬村や大町市などではクラスメートに外国につながる子どもたちが在籍し、海外を意識せざるを得ない状況になっている。グローバル化が叫ばれている現代、この流れはこれから益々進むものと思われる。近い将来、外国につながる子どもたちとクラスメートになったり、海外へ行くようになったりした時に、どんな国の人々ともコミュニケーションがとれ、手を携えて生きていくことが大切である。モンゴルの人たちやモンゴルで活躍する日本人の姿から、海外連携や国際協力の大切さについて小学生なりに感じられる機会としたい。

5 評価規準

観点	1 関心・意欲・態度	2 国際理解
評価規準	・モンゴルやボリビアの文化に親しみ、興味関心を持って考えようとしている。(1-1) ・友だちと協力して学ぼうとしている。(1-2) ・国際協力について関心を持って考えている。(1-3)	・モンゴルの文化やボリビアの文化を尊重し、知ろうとしている。(2-1) ・日本とモンゴルやボリビアなど、日本と世界の国々との関わりについて知る。(2-2) ・国際協力について知る。(2-3) ・国際協力について自分の考えをもつ。(2-4)
評価方法	・発言、ワークシート ・コミュニケーションの様子 ・授業への参加態度	・発言、ワークシート ・コミュニケーションの様子 ・授業への参加態度

6 単元の構成

0 朝の読み聞かせの時間…「せかいのひとびと（絵本）」の朗読（10／15）

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	「ハンバーガーの材料はどこから」 (10／21)	・小学生にとって身近なファストフードであるハンバーガーの材料が、外国に依存していることを知る。	・ハンバーガーの材料である、パンズ（小麦）やミート（牛肉）について、世界のどこから輸入されているのか考えさせ伝える。世界地図を利用し、関係国に付箋を貼る。
2	「輸入しているものってほかにあるの？」 (10／26)	・日本が、食材のみならず各種エネルギー資源も外国に依存していることを知り、外国とのつながりを知る。	・食べ物のほかに、日本が輸入しているものは何か問い、石油を代表に各種のエネルギー資源も外国に依存していることを知ること、外国と日本のつながりを感じ、国際協力への大切さを感じる。
3	「モンゴルってどんな国」 (11／2)	・モンゴルの基本情報などのクイズを行い、外国への興味関心を起こさせる。	・世界地図からモンゴルの位置を知ったり、首都の名前を三択形式でクイズにしたり、国会議事堂前での夕方撮影した写真を見せたりしながら、モンゴル国についての概要を伝える。
4	「モンゴルと長野（日本）は同じだよ」 (11／10)	・モンゴルと日本（長野県）での共通点を見つけ、モンゴル国への親近感を感じられるようにする。	・お寺、トロリーバス、塩の写真を対比させ、似ている点を見つけるよう仕組む。共通点が見つかることにより、さらにモンゴル国への関心を高めるように仕組む。
5	「モンゴルを知ろう」 (11／14)	・モンゴルについて理解を深める。	・モンゴル国旗や紙幣についてクイズを通しモンゴルの文化や歴史について伝える。さらにスーホの白い馬の動画、モンゴル語の通訳をしてくださったダワさんによる馬についてのインタビュー、モンゴル語の挨拶レッスンビデオを通して、モンゴルの理解を深める。
6	「わたしは せいか・ガブリエラ」 (道徳) (11／19)	・ボリビア人の父と日本人の母を持つせいか・ガブリエラちゃんの詩から、どちらの国も大切に思う気持ちやボリビアと日本の文化の違いを知る。	・信濃教育出版社「わたしたちのみち・2年」より、『わたしは せいか ガブリエラ』の国際理解・国際親善の道徳の授業を行い、ボリビアと日本の文化の違いや、国が違えど子どもに対する思いは同じであり、どちらが良い悪いと言うことはないということに気づけるよう話し合いを持たせる。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

7	「国際協力」について考えよう (11/25)	・JICA の活動を伝えと共に、国際協力について考える。	・これまでの“世界について”の学びを振り返り、「世界中の人たちが 仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが大切なのか」考える。 さらに JICA の活動を伝えと共に、国際協力について考える。モンゴル国内で活躍している JICA 隊員を始めとする日本人の活躍されている姿や東日本大震災時のモンゴルレスキュー隊員の活躍の姿から、小学校2年生としてどのような国際協力ができそうか考える。
---	---------------------------	------------------------------	--

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5 5 10	・これまでの学習を振り返る。【体験】 「これまで、勉強してきたことを覚えていますか。」	・これまでの学習を振り返り、私たちの住んでいる小谷をはじめとする日本は、世界とつながりがあることを確認する。 ・読み聞かせをした、絵本「せかいのひとびと」の1節を用い、違うところが素敵なことだということを確認する。	一斉 一斉	・これまでの学んだことを、パワーポイントスライドのダイジェスト版を見せながら振り返らせる。 ・絵本「せかいのひとびと」の1節を紹介する。	・日本と世界の国々との関わりについて知る。(2-2)【発言】
10	「世界中の人たちが 仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが 大切なのだろうか」(ペア)【探求①】【1・2・3】				・友だちと協力して学ぼうとしている。(1-2)【相談の様子】
10 5	・JICAについて説明する。 ・青年海外協力隊員の活動を紹介する。 ・新ウランバートル国際空港の建設に携わっている飯島さんの活動を紹介する。 ・東日本大震災のモンゴル国レスキュー隊員の活動を紹介する。	・JICAについてのイメージ動画見ながら活動の概要を知る。 ・トゥブ県で日本語指導をされている青年海外協力隊員山崎さんの授業の様子を見る。 ・新ウランバートル国際空港の建設に携わっている飯島さんからのメッセージを聞く。 ・東日本大震災の時に、レスキュー隊員の活躍をはじめ、モンゴルの方々が日本にたくさんの支援をしてくれたことを伝える。	一斉 一斉 一斉 一斉	・JICAの説明動画を用いながら、活動内容をなるべく端的に伝える。 ・動画(日本語指導教室・山崎隊員)協力隊員の思いや持ち味を活かした活動であることを伝える。 ・モンゴルで活躍している方は、協力隊員だけでなくいろいろな方々がおられることを伝える。 ・東日本大震災時のモンゴル国レスキュー隊の動画を用い、日本も支援されており双方向の支援があることを伝える。	国際協力について知る(2-3)【3・4】 国際協力について関心を持って考える(1-3)国際協力について知る(2-3)【1・2・3】
	「世界がよりよくなるために みなさんは どのようなことができそうですか」(ペア・小グループを問わずクラス内で自由に相談)【探求②】				
	・感想をまとめる。 「どんなことを考えたのか、発表してください。」【6】	・本時を振り返り、感想を発表する。【発信】	個人	・学習したことを振り返り、小学校2年生として、どのような国際協力ができそうか考えさせる。	国際協力について自分の考えをもつ(2-4)

7 授業事例の紹介

小単元名【「国際協力」について考えよう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 11月25日(金)第5限

(イ)実施会場 小谷小学校多目的教室

(ウ)本時の目標

「日本が海外の様々な国から資源を輸入したり、モンゴル国と日本のつながりを気づいた子どもたちが、モンゴル国で活躍する青年海外協力隊員や新ウランバートル国際空港の人材育成および技術協力を携わっている方々の活躍する姿を見たり、東日本大震災でのモンゴル国レスキュー隊の活動見たりすることを通して、国際協力について自分なりの考えを持ち、これからの生き方を考えるきっかけにすることができる。

(エ)指導のポイント

- ・本時までの学習の振り返りを取り、日本と世界がつながっていることを再度確認させる。
- ・子どもの情感につたわるよう、動画や写真をふんだんに採り入れるなどの視覚支援を行えるようなパワーポイント教材を用いる。
- ・文科省JSLカリキュラムを活かした授業展開(体験→探求→発信)を行い、児童同士での対話の時間をとりながら、受け身の学びにならないような時間をとるとともに、多様な考えを認めるよう授業を行う。

(オ)本時の展開(前ページ)

(2)授業の振り返り

本時を仕組むに当たり、文科省JSLカリキュラム(日本語指導)のトピック型と呼ばれる授業形態を活用し、体験→探求→発信をベースにした。このカリキュラムを活用することにより、外国にルーツのある子どもたちはもちろんのこと、特別に支援の必要な子どもたちにとっても授業に飽きることなく、だれにもわかりやすくなるからである。

本時に至るまでの振り返りの時間を確保することにより、日本が世界の国々につながっていることを再度確認することができ、興味を持って本時に入ることができた。【体験】

さらに、「世界中の人たちが仲よく幸せにすごせるようになるためにはどんなことが大切なのだろうか」という中心発問1を行うことにより、「相手の立場(相手軸)を大切にする」や「外国の言葉を理解する」、「話をしっかりと聞く」などの様々な考えが出された。その中でも協力する事の大切さについての発言が出され、国際協力について考えていくことの導入がスムーズに展開した。【探求1】

JICA についての概要を低学年には言葉で説明しても難しいため、プロフィール動画を見せながら補足説明しながら紹介した。

さらに国際協力の具体として、この研修会で撮影したモンゴルで活躍する青年海外協力隊員山崎さんの日本語指導教室の様子と新ウランバートル国際空港の人材育成および技術協力をされている飯島さんの活躍の様子を見せることで、子どもたちは興味を持って学ぶことができた。そして、東日本大震災時のモンゴルレスキュー隊員の活躍している姿を通じ、国際協力が双方向であることを伝えることができた。

終末場面で、児童一人一人が国際協力について2年生としてどんなことができそうか友だちと相談することで全員が考えを持つことができた。【探求2】

さらに、時間の関係上数名であったが、自分の考えをまとめ全員の前で発表することにより、多様な考え方に触れる機会となったり、自身の考えをメタ認知したりすることにつながった。【発信】

(3)使用教材

- ・絵本「せかいのひとびと」／ピーター・スピアー著・松川真弓訳 評論社
- ・パワーポイント プレゼンスライド(一部)



(4)参考資料等

- ・「交流からはじめる世界と友だちになろう」／金子美智雄監修 ほるぷ出版
- ・「暮らしがわかるアジア読本 モンゴル」／小長谷有紀 編 河出書房新社
- ・「小学生のための世界の国ぐにものしり学習ブック」／地球の歩き方編集室 (株)どりむ社
- ・「世界のともだち05 モンゴル 草原でくらすバタナー」／清水哲朗 偕成社
- ・「国際理解にやくだつ世界の遊び1 アジアの遊び1」／大貫美佐子 監修 (株)ポプラ社
- ・「わたしたちのみち2」(わたしは せいか・ガブリエラ)／「道徳・副読本」 信州教育出版社
- ・「国際理解教育実践事例集 小学校編」／文部科学省 教育出版
- ・モンゴルレスキュー隊東日本大震災インタビュー <https://www.youtube.com/watch?v=iULQZHA60fw>
- ・JICA イメージムービー2012 日本語 <https://www.youtube.com/watch?v=xd5Sqpy0okc>

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

世界に興味があった子はもちろんのこと、そうでなかった子も時間を追うごとに授業を大変楽しみにしている様子が見られた。

「明日は、世界の勉強がある、やった～」と呟く子が何人もいた。笑顔いっぱいの表情であった。

単元の最後の時間(7時間目)に、国際協力について考えるところまで国際理解教育の学びを深められた。以下は、子どもたちの最終ワークシートからの抜粋である。

『Q1. 世界がよりよくなるために、あなたはどんなことができそうですか?』

- ・私は相手軸で考えて行動したいです。思いやりの気持ちを持って考えていきたいです。
- ・世界の人たちに、お手紙をおくと良いと思います。
- ・世界が良くなるために、節約ができそうです。あと、特にけんかとか暴力をなくしたいです。
- ・ジャイカに協力して世界の人となかよくなり、助け合って優しくしあいます。
- ・いじめをやめて、ほめあいながら協力すれば世界がより良くなると思います。
- ・世界の人たちをほめ合ったりアドバイスをしたりすれば、戦争やあらそいを止められると思います。
- ・日本から水をおくれば良いと思います。また、ちがう国の言葉を覚えると世界がよくなります!!
- ・贅沢をしない、言わない。人の気持ちを考えて行動する。
- ・コミュニケーションをとり、たくさん友だちをつくって、いっぱい遊びたい。

『Q2. 今まで、世界の勉強をしてきて、思ったことや感じたことを書きましょう』

- ・モンゴルと長野といっぱい共通点があってすごいなあと思いました。
- ・モンゴルは、人間よりも動物の方が多くてはじめて知りびっくりしました。世界には、知らないことが沢山あることがわかったし、日本につながるものがあるってすごいと思いました。
- ・外国の勉強ができて良かったです。英語やモンゴル語など、ちゃんと言えたので楽しかったです。
- ・大人になったら JICA に入って、いろいろな人を助けて世界の未来をより良くしたいです。そして、いろいろなちがう国の人とも仲良くなりたいです。他の国の言葉や国のことを知りたいです!!
- ・世界の勉強をしてきて思ったことは、日本に生まれて幸せということがわかりました。モンゴルの人たちが日本を助けてくれたように、ぼくもモンゴルの人たちみたいに(いろいろな人を)助けたいです。
- ・川尻先生が行ったモンゴルもいっぱい勉強できてよかったし、ボリビアという国もはじめて知ったので、国のことが楽しくなってきました。もっと勉強したいと思いました。
- ・世界の勉強で思ったことは、世界ではこういうことは全然知らなかったもので、このクラスに入って良かったなあと思いました。ぼくも川尻先生に出会えて幸せです。大人になったら世界中に行きたいです。
- ・モンゴルとボリビアに行って、いっぱい遊んでいっぱい友だちをつくりたいです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

海外派遣前までは漠然としたプランであったが、派遣中に「今担任している子どもたちに向けて興味を持つ教材はどんなものか?」「どんな教材(写真や動画、現地素材)が国際理解教育にふさわしいのか?」考えながら取材した。

“国際協力”という小学校2年生には難しいテーマを教材化するにあたり、モンゴルより帰国してから写真や動画を整理していったり、モンゴルに関する文献や国際理解教育に関する文献を改めて読んでみる中で、単元構成をはっきりとさせていくことができた。

中でも写真や映像は低学年の子どもたちにとっては必須のアイテムであり、できる限り毎時間、視覚支援を行いながら誰もが興味や関心をもって授業に臨めるよう工夫した。特に単元序盤は、子どもたちの身近な話題(日本の食材や地元に関する事柄)を採り入れていくことで、海外の国々に興味・関心が持てるよう工夫した。

海外の国々に十分興味・関心を持てたところで、国際協力に関する授業を行うよう計画した。その国際協力に関する単元終末の授業に関しては、モンゴルで実際に得られた資料だけでなく、各種の映像資料を積極的に活用することで、子どもたちにとって、なるべく平易になるよう工夫することができた。

最後に、単元を通して子どもたちの大きな変容が見られた。特に2年生の子どもたちは、年齢による発達段階から自分中心に物事を考える子が多いが、何人もの子が自分だけ良ければいいという自分軸の考え方から、相手の立場に立って行動する相手軸に沿った行動が大切であるという“人として大切なこと”にまで気づけたことは大変素晴らしいことだと思った。

・PDCA サイクルにおけるチェックとアクション

(P)単元終末場面、国際協力に関する授業を仕組むことを念頭に、逆算的に単元を設定していった。

また、本単元の1時間目がとても重要だと考え、子どもたちの興味・関心が喚起できる食についてのことや地元長野に関することを織り交ぜながら単元を設定した。

(D) 低学年に向けて国際理解教育を実施するにあたり、なるべく難しい言葉を使わず、写真や動画ができる限り採り入れながら楽しく学べるよう教材を作成し授業に臨んだ。

また、一斉指導的な全体講義形式を減らし、クイズを採り入れながら児童同士が対話を通して考える場面を設定したり、文科省JSLカリキュラムトピック型の授業スタイルを活用し、授業の終末場面で発信したりするよう授業を工夫した。

(C) ほぼ構想通りの単元で授業を行っていくことができた。モンゴルで得られた教材を中心に据えながら授業を行っていったのはもちろんのこと、地元長野の道徳副読本「わたしたちのみち2」を活用したり、絵本「せかいのひとびと」の読み聞かせを行ったり、世界に関する教材を横断的に活用できたことが、子どもたちにとって飽きることなく学びを深めていくことにつながったものと思われる。

(A) 子どもたちにとって、知識としての学び(国際理解教育)は十分できたように思う。しかし、「これから実際にどんな実践ができるのか?」行動としての学びまでには至らなかったため、単元終了後も児童自らが書いた国際協力の数々(8 単元をとおした児童生徒の反応/変化の項 参照)が行えるのか変容を見守りたい。児童の個の変容が見られたら、そのことをクラス全体にも紹介しながら、クラス全体の変容につなげて行ければ良いと考えている。

10 教師海外研修に参加して

この研修会に応募するにあたり「教師海外研修に参加する以前も、国際理解教育につながる学習会やセミナーに参加したり各種の文献を読んだりしながら学びを深め授業実践や発表も行ってきた。しかし、開発途上国の現状については自分自身がはっきりとわかっておらず、自分の目で外国の様子をじっくりと見たり体験したりしなければ、国際理解教育の本質(開発教育の推進)を子どもたちや先生方に伝えられないのではないかと。だからこそ、この研修会を更なる国際理解教育推進の新たな一歩として進めたい。」と書いた。その願いの一端を、自分が担任する子どもたちとの学習を通じて達成できたと感じている。

研修前に、各種文献を読んだり JICA の方々から教えていただいたりして、モンゴルの国のおよそのイメージを持っていたが、実際に行ってみて大きな違いがあり大変驚いた。モンゴルと聞いて、遊牧民のイメージが強く、町中の景色や大渋滞などの想像はつかなかったが、ウランバートル市内の人々の生活は全く違ったものであった。

また、本年7月にバングラデシュ首都ダッカ市内のレストランで起きたテロ事件があり、心配事の1つとして治安問題があり、旅立つ前は非常に不安であった。荷物を常に前に持って行動をすることなど、海外へ出たときの基本的な防犯対策はもちろんのこと、捨て銭を用意するなど大変用心していたが、実際のモンゴルはとても治安の良い国であると感じた。モンゴル国会議事堂前のスフバートル広場で、夜遅くまで親子連れが乗り物に乗って遊んでいたりと、憩いの一時を楽しんだりする姿があった。日本では考えられない光景に驚くとともに、素敵な市民生活の一端を見ることができ心温まった。

さらにモンゴルのイメージそのものである遊牧民のお宅にお邪魔させていただけたことは、モンゴルの人々の生活を肌で感じることに繋がった。特に、馬乳酒をいただいたときに、参加された先生方があまり飲めない場面があったが、もう一人の男性の先生と二人で飲み干したのはとても貴重な経験となった。馬乳酒が日本の「カルピス」の味に似ており、帰国してから実際にモンゴルの馬乳酒をヒントに作られたことがわかり日本とのつながりを感じ大変嬉しかった。

チベット・モンゴル仏教の総本山であるガンダン寺やウランバートル市内を走っているトロリーバス、岩塩は、私の住む長野県にある善光寺や立山黒部アルペンルートで日本唯一走っているトロリーバス、小谷村にある古道「塩の道」と共通点があることなど、日本とのつながりをいろいろな場面で感じ嬉しく思った。これらのことは、文献からは読み取れないことであり、大変貴重な経験をさせていただいた。また、ローカルからグローバルへとつながるグローバルな視点を学ばせていただけたことは、これからの国際理解教育推進のキーになる部分であるのでとても大きな収穫であった。「体験に勝る学習はなし」ということを肌で感じられた研修会であった。

この研修会を通じていろいろな方とのつながりは何ものにも代えがたいものであると感じている。このネットワークを大切に、国際理解教育の推進に今後も邁進して行けたら良いと思っている。さらに、教師海外研修会で学んだことを子どもたちや必要とされる場で還元できたら良いと思っている。

最後に、JICAの皆様はじめとする沢山の方々との出会い、支援に感謝して私のまとめにさせていただきます。ありがとうございました。